

平成17年度広島市学校教育研究グループ活動研究成果報告書

伝承文化であるわらべ歌遊びを、  
保育に継続して取り入れる効果を探る



わらべ歌遊びの研究

代表 広島市立福木幼稚園

藤井幸子

# 目 次

|     |                            |    |
|-----|----------------------------|----|
| 1   | 研究の概要                      |    |
| (1) | わらべ歌遊びとは                   | 1  |
| (2) | 研究のねらい                     | 1  |
| (3) | 研究のねらいを設定した理由              | 1  |
| (4) | 実態把握                       | 1  |
| (5) | 研究仮説                       | 1  |
| (6) | 研究の手だて                     | 1  |
| 2   | 研究の実践                      | 2  |
| (1) | 講師招聘による研究保育の反省と指導助言        | 2  |
| (2) | 抽出児の人とのかかわりを視点とした発達の経過について | 7  |
| (3) | 第2回アンケート調査                 | 8  |
| 3   | 研究の成果                      | 10 |
| 4   | 課題                         | 10 |
| 5   | 参考文献                       | 10 |

## 1 研究の概要

### (1) わらべ歌遊びとは

昔から子どもたちにうたいつがれてきた遊びである。誰それが作ったという歌ではなく長い時代を経て人から人へと伝えられてきた伝承文化であり、そこには人間として生きるための大切なメッセージが込められている。

メロディは半音進行がなく、ドレミソラの5音で成り立ち、音域が狭く、小節が少ない、音の跳躍も少ないなど、子どもにとって無理なく自然にうたうことができる。

もう一つの大きな特徴は、歌と遊びが一体となっており、遊びながら体のいろいろな部分を統合して動かすことにより、身体機能の発達を高めることができる。

### (2) 研究のねらい

伝承文化であるわらべ歌遊びに着目し、継続的に保育に取り入れることによる子どもの発達の姿を明らかにする。

### (3) 研究のねらいを設定した理由

子どもたちが豊かな生活経験を通して生きる力の基礎を培うために、日々の保育はどうあればよいのか、また、人とかかわる力やよりよく生きようとする力、豊かな心など、そうした発達の姿を目に見えるものにするには、どうあればよいのか、それらの手がかりをわらべ歌遊びに求めた。わらべ歌遊びを継続して実践することにより子どもたちの育ちを追いその効果を明らかにするとともに、わらべ歌遊びを取り入れた保育を体系化していきたい。

### (4) 実態把握 (第1回生活実態アンケート調査平成17年6月15日実施・資料に添付)

家庭でのわらべ歌に関する意識調査を行った。保護者(母親)の平均年齢は33.12歳で幼児期は昭和50年頃となる。よくうたっていたという歌は童謡が殆どで、歌謡曲やアニメの主題歌もあがっており、テレビの影響を大きく受けている様子が見られる。わらべ歌と童謡の違いがわからないといった回答や、思い出に残っているわらべ歌としては『はないちもんめ』『ずいずいずっころばし』『かごめかごめ』など、全国どこでもうたわれているポピュラーな曲があがった。

「家庭で子どもにわらべ歌をうたったことがある」という回答は66%であったが、「よくする遊び」として、わらべ歌という回答はなかった。聞き取りでは、テレビやビデオを見せている時間が多く、向かい合って遊ぶ、目と目を見て話すということにあまり意識を向けたことがなかったという回答がほとんどを占めた。

### (5) 研究仮説

入園当初の子どもたちのほとんどが集中力が続かず、目と目を合わせて話を聞くことがなく、上記の家庭での生活実態とを考え合わせ、人として生きる力をはぐくむために、次のような研究仮説をたてた。

『日常の保育において、わらべ歌を継続して取り入れることにより、よく見てよく聞き、人として生きる力の基礎をはぐくむことができる。』

### (6) 研究の手だて

本研究は、わらべ歌遊びを保育の中に位置付け体系化させるために、実践研究を主とし、講師を招聘した研究保育実践を研究の柱とした。継続して講師を招聘することに

より、園児は講師による直接的な指導を受けることができ、保育者はその指導力を真似て資質の向上を目指すことができる。

講師            わらべ歌研究家  
                                槇林 芳恵 氏

6月            実態把握・・・アンケートによる現状分析  
7月～1月      講師を招聘した研究保育の継続（5回）  
2月            実態把握・・・アンケートによる結果の分析・考察  
                                研究のまとめ・・・わらべ歌遊びを取り入れた保育の体系化

## 2 研究の実践

(1) 講師招聘による研究保育の反省と指導助言            ※指導案は資料に添付

第1回 平成17年7月5日実施

<4歳児もも組の研究保育についての反省>

- いつもと同じ状態で、特に男児がなかなか落ち着かない。教師の声がどんどん大きくなっている。
- 園児の集ませ方、座らせ方などいつも同じでワンパターンになっている。  
(保育者)
- いつもは保育室から飛び出したり、教師の話が聞けなかったりしている A 児が今日は他の園児と同じようについてまわっていた。教師の目を見ていた。
- ビデオを撮ることで一人一人の表情、教師の表情などよく見えた。こういった視点が必要だと改めて感じた。
- 3週間前に転園してきた D 児。初めは手の動きなど体が硬かったが、わらべ歌を通して動きが柔らかくなってきた。教師がわらべ歌に助けてもらっている。

【槇林先生の指導助言】

- 保育の流れを通して子どもがどう成長していくか。次へつなげるためのアイディアを教師が持っているかないかで大きく違う。
- 教師が一人一人を受け止め、きちんと把握しなければ全体は育たない。
- 子どもに力があることを知って、教師が育てなくてはいけない。もも組については聞く力はある。よい耳、受け止める力、それを教師がしっかり押さえることが大切である。今日やったことを次へつなげていかないと意味がない。
- 「私の番よ」「よく見ていたね」「よく見ていないとわからないよ」  
教師はこれらのことを覚えさせようと思うなら絶対に妥協しない。
- 一対一で目を合わせようとしめない場合、待つ必要はない。「受け入れる」「待つ」は「やさしさ」とは違う。子どもには「本気の姿」を見せないと見る力は育たない。一回黙ってみる。本気の声で「目を合わせないとわからないよ」など知らせると、言われなくても見る子どもになれる。

<5歳児ふじ組の研究保育についての反省>

- 子どもがふざけてしまう姿があった。最後まで集中できるようにしたい。特に

うたい方、声掛けの工夫をしていきたい。(保育者)

- ふざける姿を見せる子どもに対しては、受け入れつつもだめなことはだめと伝えていくことが必要である。

**【榎林先生の指導助言】**

- 教師が「やわらかく小さい声でうたおう」と気を付けていることが分かる。
- 子どもたちの拍感もきれいである。もっとうたってもいい。言葉をはさまず歌で動くようにするとよい耳が育つ。

(成果) ○ 相手の目を見て話を聞こうとする姿が見られた。

(課題) ○ 一対一のわらべ歌を4歳児、5歳児ともに続けていく。

- 言葉をはさまず、歌で行動に移せるようにする。

第2回 平成17年9月2日実施

<4歳児もも組の研究保育についての反省>

- 今日は目を見て話を聞くことに重点をおいて保育にあたった。外遊びでしっかり体を動かした後でもあり、落ち着いていた。(保育者)
- 「Dちゃんここに座って」「Dちゃんって優しいよね」など友達に受け入れてもらうことでD児も落ち着いてきているのではないか。友達の力の大きさを感じた
- A児、B児共に片足跳びができていない。両足跳びだった。そういった実態を教師は押さえないといけない。

**【榎林先生の指導助言】**

- まねっこ(わらべ歌)をしたらしっかり褒める。見せて、聞かせて、真似て人間として育てていく。一対一のかかわりを是非してほしい。教師が子ども一人一人と向き合うことで、自信がついていく。
- 片足跳びができない場合は両足跳びから入ってもいい。段階の中で発達を促す。
- 正座は遊びの中で教え、苦痛にさせない。例えばにらめっこなどがよい。

<5歳児ふじ組の研究保育についての反省>

- 前回、しっかりうたい込むようにと反省があり、今回はうたうことに気を取られ、押さえたいポイントを逃して、進めてしまった。(保育者)
- リズムをとる難しさを感じた。皆が同じリズムになるまでうたえばよかった。そこで「一つのリズムになったね」と褒めるとよい。集団の力が育つ。
- 簡単な手遊びのできない子には、日頃から個別にかかわっていくことが必要である。このままでは自信を無くしてしまう。

**【榎林先生の指導助言】**

- 鉛筆を上手に持てる子どもを育てるための一つとして、えかきうたを取り入れた。鉛筆をうまく持つ→器用になる→自分に自信がつく→絵を楽しむ  
描いた後の仕上げが大切。本気で描ける子は本気で遊べる子である。  
何回もうたう→覚える→動きもつながる→歌を好きになる

- 「見ててちょうだい」との言葉を掛けたとき、見ることを妥協しない。不安がってはだめである。待っていたら子どもは育たない。そして「よく見てくれてありがとう」を返すことが大切である。

(成果) ○ 教師が大きな声を出さなくても子どもがうたっていた。ちょうどよい控え

めな声だった。また、言葉も必要最小限の言葉だった。

- (課題) ○ 4歳児は対一を平等にし、5歳児はピックアップして行う。例えばこの子には他の子の3倍というように、その子の実態に合わせて取り入れていく必要がある。

### 第3回 平成17年10月28日実施

#### <4歳児もも組の研究保育についての反省>

- 昼食が遅れ、弁当後すぐ研究保育となったため担任も心にゆとりがないまま始めてしまった。大きな声、低い声でうたってしまい、音に敏感な子どもたちはそのような声では聞くどころか、ますます騒がしくなってしまった。(保育者)
- 感じたままに子どもは歌をうたう。教師の声・音の役目の大切さを感じる。子どもたちの声や音に対してどれだけ注目しているか、意識しておく必要がある。

#### 【榎林先生の指導助言】

- 子どもたちの背筋がしっかりしていないため、自分の体を自分で支えきれていない。
- 『どんぐりころちゃん』の“どんぐりはちくりしょ”のところでも床へ寝ころんだ子どもの姿(表現)をどう見るか?→こう考えないと子どもの感性は伸ばしてやれない。
- 教師のすることを真似て一緒にしようとせず、なぜ子どもたちが自分流にしようのか?→個がバラバラになるようなことをしてはいけない。

#### <5歳児ふじ組の研究保育についての反省>

- 声が低かった。うたい出しに気を付けたい。心地よさを味わえるうたい方になるようにしたい。

#### 【榎林先生の指導助言】

- 二つのペープサートを作り、声は教師の声のままにするとよかった。
- よく見る目とよく聞く力を育てることが学習につながっていく。意識して育てていこう。

### 榎林先生を迎えての研修会 平成17年11月21日実施

これまで3回の研究保育ビデオの記録を見て、抽出児を中心に教師の言葉掛けと園児の言葉、動きを綿密に書き留めたものをもとに話し合った。

- 第2回研究保育で「『おふねがぎっちらこ』が楽しかった」と言った子どもたちの言葉を思い出して、指導案を考えるときに取り入れる。
  - “具体的に体を動かして遊びたい”という子どもの気持ちを大切にしよう
  - ◎ 子どもが喜んでできることをやらせ、満足させることが大切である。
  - ◎ 決して教師が子どもたちと一緒になって大声を張り上げない。このようなことをすると教師は自分を見失う。
- 時間内で成果を上げようと思うのなら、きまりを作っておかなければいけない。
- これまでのわらべ歌の実践記録を参照に、具体的に体を動かす遊びをさせてほしい。見る力、聞く力は落ち着かないと育たない。そのためには気持ちを発散させなくてはならない。

- どうしてふざけるのか子どもの心理を考えたり、どうしたらふざけないか方法を考え、個に応じた発散方法を見つけることが大切である。→ 鬼決め遊びが適当である。
- (成果) ○ 保育者の歌をよく聞き、何をしてくれるのだろうかに興味をもって少しずつ待てるようになってきた。歌も力まずにうたうようになってきた。
- (課題) ○ 子どもの心を教師に向けるにはどうしたらよいかを常に考える。
  - 遊びのルールを守れば、楽しい遊びになることを知らせる必要がある。

第4回 平成17年11月29日実施

**【榎林先生の指導助言】**

<講師による4歳児もも組の保育指導>

- 鬼遊びの予定だったが、子どもの様子を見るとハイテンションになっており能力を出しきることが今の発達段階だと判断し、跳んだり『キャーロノメダマニ』、寝転んだり（イモムシ）這ったり（お馬）させた。全員が動いたのを見られたので成功したと思っている。
- 『キーリスチョン』を男女に分けてしたが、全員が経験できると子どもたちがわかったので友達がしている間待つことができたのだろう。また自分の出番があった『くまさんのおでかけ』も自分勝手な行動をとらず全員で一緒に動くことができた。
- 4歳児は自己発散したい年頃である。子どもの心を教師へ向けるためには、教師は「聞いてちょうだい」と言うより、発散させて体でわからせることが大切である。
- 年間を通して遊びが続いた結果、完成度があった遊びは、指導計画に実践度を書き留めておくことが必要である。（“4歳児の終わりには○と○は全員ができるように”と目的を達成しなくてはいけない。）
- 指導案の中で“ほめる”がよく使われているが、ポイントを押さえ、モデルを示してそれができたらほめるようにしよう。

<講師による5歳児ふじ組の保育指導>

- 「集まろう」と教師が声を掛けなくても子どもたちは自然に集まり、次へ進めることができた。
- 歌で始まり歌で終わる（歌で遊ぶ子）ことが大切である。“必ず子どもたちはついてくる”と信じて進める。
- いろいろなわらべ歌を知るのが担任の仕事であり完成度を高めると力がついてくる。

<次回へ向けて>

- 指導案の書き方を少し工夫してほしい。
  - ・“教師の援助”の欄の横に“教師の準備”の欄を設け、教師自身が準備しておかなくてはならないことを記入する。そしてその横に“実践結果”の欄を設け保育を实践した後に結果を記入するとよい。こうすると自分の問題点が見えてくる。
  - ・計画案にねらいを入れる「課業案」を立ててみるのもよい。初め（導入部）・遊ぶ（主要部）おわり（終結部）と区切って書くとわかりやすい。一つの流れ

を考えると、静（座る）や動（遊ぶ）、子どもの状態をイメージしながら作成する。落ち着く心を維持することは長時間は難しいので、必ず開放する遊びの主要部を考えることが必要である。

- これまでのわらべ歌遊びの完成度を見せてもらいたい。
- ・ 5歳児は教師がうたい出すとさっと子どもたちが自然に集まってくるのを見せてもらいたい。歌を聞けばすぐ先生の方に顔を向けられる子どもになってほしい。
- ・ 4歳児は子どもの気持ちが発散できる活動を見せてもらいたい。大切なことは子どもが一人一人成長したとき、それぞれの子どもの位置付けをしてあげられる指導者になることではないだろうか。

#### 第5回 平成18年1月24日実施

##### < 4歳児もも組の研究保育についての反省 >

- 『ぶーぶーぶー』を子どもたちは静かに興味をもって聞いてくれた。その後の体を動かす活動では騒がしくなりふざける園児もでてきた。 (保育者)
- 『オニサノルスニ』では豆になった子が次の豆になる子を早く見つけていた。
- 箱に入った豆の音を聞かせたとき、子どもたちから「どんぐり」「じゅずだま」「くり」と答えが返ってきた。これまでの経験がしっかり生きていることがわかった。目では見えないが音で遊ぶことで五感を育てている。音を聞かせただけで遊ぶことができた。
- 『オニサノルスニ』は1回うたうのか2回うたうのかを、言葉を足して知らせるようではいけない。歌が途切れなくて役を交代できるようになったらよい。4歳児では役交代は難しいが勇気をもって繰り返しやってほしい。

##### 【榎林先生の指導助言】

- “騒ぐのはあたりまえ”で終わらせずそのとき、これまでと比較しよくなった点は形がくずれないようにした”ことである。子どもたちが手をつないで中央に向かって歩き、再び歌に合わせて元の“鍋”に戻れたことはすばらしい。『子ども風の子、じじばば火の子』をしたとき(榎林先生)も中では大騒ぎしたが元へ戻れた。
- 保育者の声が柔らかくなった。柔らかい音色を常に意識し、そうしたうたい方にすぐに帰ることが大切である。

##### < 5歳児ふじ組の研究保育についての反省 >

- 『ゆうびんはいたつ』の歌に合わせて送った絵カードが全員に見えず、周りの園児たちがざわついてしまっていた。
- 届けられた絵カードを見た子どもがすぐ絵を見てそのわらべ歌をうたったのには感心した。
- ルールの説明をしなくても歌をうたいながら活動が流れていたのはよかった。
- 転入園したばかりの子どもがとてもいい笑顔で参加していた。わらべうた遊びにより自分の居場所を見つけていた。

##### 【榎林先生の指導助言】

- 前回教えた『すいかばたけ』でその後遊んでみたか？ 一度やったことをもう



1回やってみることで子どもたちに力がついてくる。子どもたち同士で解決させようと思うなら、繰り返しやって能力を伸ばし、見届けることをして次へつなげてほしい。

(成果) ○ 言葉をはさまなくても、子どもたちが教師に引きつけられるようになってきた。子どもたちの目や耳がどちらに向いているかがはっきり見えるようになってきた。

(課題) ○ わらべ歌を幼児期に必要なものとして伝えていきたい。先生の肉声で本物を与えよう。これからの実践あるのみである。

○ 毎日一人一人に時間をとって向き合う積み重ねをすることで、子どもたちはさらに変わってくると思われる。このことを今後も大切にしていかなければならない。

## (2) 抽出見の人とのかかわりを視点とした発達の経過について

### < 4歳児A児について >

○ 言葉の発達や理解力に欠ける面があり、自分の思い通りにならないとそこからすぐ逃げ出したり、理由もなく近くにいる友達に手を出したりすることがある。入園当初は目を見て話を聞くことができなかった。

### < 4歳児B児について >

○ 人とかかわりたいのに相手の感情が読めず逆に相手のいやがることを無遠慮にしてしまうことがある。人が話をしているのに遮り、自分の言いたいことを思いつくまま言ってしまう。

### < 4歳児C児について >

○ 指示されたことに対し一対一で向き合うと理解できることが多いが、集団の中では理解力に欠ける。人との接し方がわからず、急に大声を出して周りの友達にぶつかったり、じっくり落ち着いて話を聞けなかったりすることがよくある。

### < 抽出見に共通した変容 >

○ わらべ歌が始まると一緒にうたったり、体を動かしたりと、喜んで自分から表現する姿がよく見られるようになってきた。

○ 一対一で向かい合ってするわらべ歌遊びを繰り返す内に、落ち着いて相手の目を見て視線を動かさずに遊ぶようになり、また話を聞こうとするようになってきた。

○ わらべ歌遊びを通して順番があることがわかり、自分に番が回ってくるまで待てるようになってきた。

○ わらべ歌遊びのときは、大声で叫んだりどなったりすることなく、小さくやわらかな声でうたうことができるようになった。声の出し方は体の動きとも関連し、動作がおだやかになり、相手の動きと合わせようとするようになってきた。

### < A児の変容 >

○ クラスの活動で興味のないことには全く参加しようとしなかったが、わらべ歌遊びだけは参加し、たとえ寝転んではいても見て聞くことができた。入園当初は、オウム返しをするなど会話が成り立たなかったが、わらべ歌を覚えて喜んでうたい、語彙が増え、発音がはっきりとしてきた。現在は助詞の入った二語文が使えるよう

になっている。

#### < B児の変容 >

- わらべ歌に興味をもち、一番になって歌詞を正確に口ずさむことができる。一対一で遊ぶことを欲し、おだやかな表情を見せる。わらべ歌で遊んでいても興奮するときがあるが、自分から場の状況に合わせてられるようになってきた。保護者にわらべ歌遊びによる成長を伝えると、家庭ではテレビやゲームに集中し、わらべ歌はうたわないとのことであった。わらべ歌は向き合っただけで相手をしてもらう遊びであることを分かってもらえるようにすることが課題である。

#### < C児の変容 >

- わらべ歌に興味をもち自分流に解釈して家庭でもうたうほどである。保護者が熱心でわらべ歌の楽譜を持ち帰り一緒に遊んでもらっている。興奮せず安定した気持ちで過ごせる時間がわらべ歌遊びによってもつことができている。

#### < 抽出児を含めたもも組の変容の様子（4歳児もも組の保育記録より） >

- 『おん正々』をうたい始めると、子どもたちは歌に合わせて踊り出す。歌詞も難しいのにとってもよく覚えている。この歌はとても好きなようだ。お手玉を一人ずつ担任に投げて受け取る遊び『いちびのき』も全員が優しく投げ返すことができた。先週盛り上がりすぎた『こども風の子、じじばば火の子』は、最初は大きな声でうたい足音も激しかったが、上手な子を一人ほめると他の子どもたちも上手な子と同じようにリズムカルにやさしい声で足音軽やかにきれいな円を描き、静かに皆が集まり、また、円を作る。わらべ歌は何度も繰り返し楽しむことができる。一度より二度。今度は三度目をやってみよう。

### （3）第2回アンケート調査 平成18年2月3日実施

#### ≪ 4歳児もも組 ≫

#### “家庭でうたったり楽しんだりしたわらべ歌がありますか” に対する回答

- ・『ひとやまこえて』『みみずが三匹』など、具体的な曲名が18曲、30回答あがる。
- ・「題名はよくわからないがよく口ずさんでいる」「子どもが幼稚園で教えてもらった歌を口ずさんだとき、一緒に教えてもらい、手振りをつけて楽しそうにうたってくれる」などの記述の回答もあった。

#### < アンケート結果の考察 >

- ・園でよくうたっている子どもは、家庭でもよくうたうことが分かったが、うたわない子どもがいることも分かった。園日よりや保護者通信などを通じ歌詞や楽譜を知らせるなどして、家庭でも親子や兄弟でうたって遊べるよう工夫していきたい。
- ・題名はわからないが、その場その場でうたっていたという記述から、まだたくさんの歌がうたわれていることがわかった。
- ・園でわらべ歌遊びをしている様子を参観する回数を増やしたり、親子で一緒にわらべ歌遊びを楽しんだりしながら、親自身もわらべ歌遊びに触れる機会を多くもつようにすればさらに親しみが深まるのではないだろうか。

#### わらべ歌遊びを通して成長したと感じることやわらべ歌遊びの園の取り組みに対する意見

- ・自分が覚えてきた歌や手遊びを家に帰って家族や兄弟に教えてくれる姿はとても成長

したと思う。家族の触れ合いも増えた。

- ・普段の生活の中で数を数えるときなど自然とわらべ歌のフレーズが出ているのはすごいと感心する。本当に心豊かな教育を受けさせてもらっているのだと実感している。
- ・成長したかはわからないが、とても優しい顔と声でうたう姿を見るとほのぼのとした気持ちになる。先生や園全体がそういう雰囲気なのでしょう。自然に口ずさんでいる。
- ・子どもがわらべ歌をうたうとき歌詞に不明瞭なところがあるが、先生の生の歌声を聞くだけで覚えることはすごい。習った日に歌詞をもらえると一緒にうたえると思う。
- ・歌は心を豊かにしてくれるので、私も教えてもらい一緒にうたうようにしていきたい。
- ・わらべ歌とは地域の歌ということでしょうか。いろいろなものを知るのはとてもよいことだと思っている。

#### <アンケート結果の考察>

- ・子どもたちが家庭に帰ってもうたっている様子がうかがえ、家庭と園との連携ができていることが感じられる。
- ・子どもの心の育ちをわらべ歌をうたう中で見つけてもらっているのは、わらべ歌のよさであろう。
- ・優しい声でうたうようになった、よく聞く力・集中力が育っている、相手の目を見てうたう、歌を覚えようと努力する姿勢が見られる、家族や兄弟のかかわりが増えた、うたいながら数えられるようになったなどわらべ歌のよさに保護者自身が気付いてきた。
- ・わらべ歌遊びに対する否定的な意見は全く無かった。
- ・6月のアンケートで「お子様にわらべ歌をうたってあげたことがありますか」に対する肯定的な回答が58%だったのが、今回のアンケートで「子どもとともにわらべ歌遊びを知ったり楽しんだりすることができた」との回答が92%に増えていたのは大きな成果である。
- ・わらべ歌の取り組みを保育の中に位置付けていることを、保護者に明確に知らせる努力がさらに必要である

#### << 5歳児ふじ組 >>

##### “家庭でうたったり楽しんだりしたわらべ歌がありますか” に対する回答

- ・『すいかばたけ』『おてぶしてぶし』など、具体的な曲名が23曲、39回答あがる。
- ・「歌名がよく分からないが手と手を合わせてやっている」「園で習った歌がほとんどで母親としては、知らない歌もあり手遊びを交えて教えてもらいながら一緒に遊んだ。」などの記述の回答もあった。

#### <アンケート結果の考察>

- ・歌の題名が記入された量が多い。年少もも組の1.3倍あった。家庭でいろいろなわらべ歌を楽しめるようになり、経験の積み重ねが感じられる。
- ・母親の世代は、わらべ歌をうたって遊んだ経験は少なく、子どもから親にかかわっていつている姿をうかがうことができる。

##### わらべ歌遊びを通して成長したと感じることやわらべ歌遊びの園の取り組みに対する意見

- ・登降園時や家庭で、よくわらべ歌をうたい、下の子にも優しい顔でうたってあげていた。わらべ歌に触れ合う機会は非常に少ないので、これからも続けてほしい。

- ・子どもはもちろんのこと、親の私も心が和んだ。私自身わらべ歌にあまりなじみが無かったが、子どもが教えてくれて、一緒にほのぼのとした経験ができた。
- ・子どもが自然とわらべ歌をうたっているのを聞くと、穏やかな気持ちになる。
- ・テンポの速い曲がよく耳に入ってくるが、それに比べてわらべ歌はゆっくりとしている。そのためかどうかは分からないが、落ち着いていると思う。わらべ歌を習ったことで、大人になっても自然に口ずさみ、“落ち着ける場所”をもらった気がする。
- ・榎林先生が来られたことをうれしそうに話す。楽しみにしているようだった。

#### <アンケート結果の考察>

- ・これからも続けていってほしいという、今後に向けての積極的な意見があがっているのは、幼稚園の取り組みとして評価されていることであろう。
- ・講師を招聘したわらべ歌遊びの研究を、子ども自身が楽しみに待つようになる姿が見られたことは、生きた実践になっていることを感じる。
- ・わらべ歌遊びの取り組みを保育に位置付けていることを保護者に明確に理解してもらえ手だてをとるようにしていきたい。園で親子でのわらべ歌遊びをする場をもっと設けるなど、積極的な働きかけが必要だったかと思う。
- ・わらべ歌遊びを通して成長している姿を、しっかり伝えていく努力をしていきたい。

### 3 研究の成果

○ わらべ歌の理論研究をしたことで、わらべ歌の特徴やわらべ歌で何が育つのか、具体的に理解が深まり指導への意欲が高まった。うたうことの楽しさや心地よさ、よく見てよく聞こうとする力、相手とかかわろうとする力、自然へ呼びかける力、数や言葉など認識力の向上、身体運動機能を高める力など、子どもたちの内面に育っているものを推しはかることができるようになってきた。また、わらべ歌の理論に基づいて実践事例を、指導計画としてまとめることができた。 ※指導計画は資料に添付

○ 講師を招聘し、研究保育を継続したことで 実際にわらべ歌遊びの遊び方を学び、子どもたちへの伝え方の指導を受けることができた。教師が一人一人を受けとめ、一対一で目を合わせて向き合うことで子どもたちが変わっていったことを実感した。特に、クラスの中で気になる子どもたちの変容は明らかであった。これらの事例は、研究仮説の裏付けとなった。

### 4 課題

一対一で向き合い信頼関係を育むことにより、子どもは変わっていく。子どもが変わってはじめてわらべ歌遊びを実践したと言える。一人残らず友達と一緒に楽しんで遊ぶ子どもになるために、また、わらべ歌遊びを幼児期に必要なものとして伝えていくために、教師の実践力をさらに高め、日々子どもたちと向き合っていきたい。

### 5 参考文献

『新訂わらべうたであそぼう』

乳児のあそび・うた 年少編 年中編 年長編 明治図書

『人を育てる唄』『知恵を育てる唄』『呼びかけの唄』

遠野のわらべ唄の語り伝え 阿部ヤエ エイデル研究所

『幼稚園保育園のわらべうた・あそび』 畑礼子 知念直美 大倉美代子 明治図書